第1課　神は創造された

【暗唱聖句】

「弱者を虐げる者は造り主を嘲る。造り主を尊ぶ人は乏しい人を憐れむ」箴言 14章 31節

【日曜日・神―被造物を垣間見る】

『我らは神の中に生き、動き、存在する』使徒17：28

わたしたちの存在は創造主なる神様を抜きに考えることはできません。わたしたちは神様の中に生き、動き、存在しているのです。わたしたちの命は神様から始まったからです。創造主なる神様はわが子のようにわたしたちをいつも守り、育み、導いてくださいます。このことをいつも覚えながら生きることが、人間の幸せの原点です。

神様が創造されたすべての被造物の中に、わたしたちは神様のご品性や力、愛などを垣間見ることができます。自然界は神様のご栄光をたたえ、無限の宇宙は神様の無限や偉大さを物語り、そしてわたしたち人間は、「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」（創世記１：26）と神様が言われているように、わたしたちは神様のご栄光が反映されるべくして造られたのです。だから、人間は罪に汚れていてもなお、愛が湧き上がり、愛に感動し、愛が大切なことであることを知っているのです。

また神様は関係を重んじられます。神様と人との関係、人と人との関係、人と他の被造物との関係など、常に正しい関係を築くように教えています。正しい関係の中に生きることによって人は、幸せになることができるのです。

【月曜日・完全な世界】

神様がはなはだ良かったと言われたエデンの園をはじめとする、この世界は今とは大きく異なっていました。すべてが輝いており、優しさと喜びに満ち、いばらやあざみ、恐ろしいものや険しいものなども一切ありませんでした。しかし罪を犯した後の世界も、聖書は自然の素晴らしさを通して神様の栄光をたたえています。だとするなら、罪を犯す前の世界、そしてノアの大洪水が起こる前の世界はどれほど素晴らしかったことでしょう。

また神様が良しとされたことで、神様の創造の業に一区切りが打たれていきます。最初によしとされたのは、光を創造され１日目でした。

「神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である」創世記1:3～5

神様は光を見て良しとされました。そして光と闇と分けられました。人間にとって光が最も大切なものです。まず神様は光を生じさせて闇を払うことで一区切りを打ちました。次に、神様は、水と水を分け、人が住む大地を分けられたところで良しと言われます。これは２日目と３日目にかけてのことでありました。

「神は言われた。「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。神は言われた。「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。」そのようになった。神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、良しとされた」創世記1:6～10

創造の１日ごとに良しとされたのではないことがわかります。人間が生きるために最適なものを作った後に良しと一区切りを打たれていることがわかります。次に良しと言われたのは、人間の食べ物となる植物を創造された後でした。

「地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があった。第三の日である。」創世記/ 01章 12、13節

3日目は２回良しと言われたことがわかります。ここからも１日の創造の業を終えて神様は良しと満足されたわけではないことがわかります。すべてが人間にとって良いと言われているのです。その後も、太陽と月と星を創造されて昼と夜をつかさどらせて良しとされ、鳥や魚、獣や昆虫を創造されて良しとされていきます。そして、最後にご自分にかたどって人間を創造されたあと、「良し」とは言われないのです。「良し」との宣言はすべて人間のためだったからでしょう。しかし、その変わりに、こう書かれてあります。

「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。」創世記1章 31節

人間が創造されたとき、すでに人間に必要な神様が良しとされた素晴らしい環境が整っていました。その一つひとつを神様は人間に示していきながら管理するようにと言われ、そして、ご自分に似せて造られた人間と、その人間のために造られた自然界を、改めて見渡したとき、それは極めて良かったと思われたのでした。神様が御心に描かれた完全な世界が完成したのです。

【火曜日・地球の管理者】

神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」創世記1:28

支配せよとは、人間が神様から託されたこの素晴らしい自然の調和を保つよう、責任をもって管理せよということです。それはわたしたちにとっても喜びとなり、幸せとなるからです。

「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。主なる神は人に命じて言われた」創世記2：15

この「耕す」と訳されている言葉は、「働く」という意味の言葉です。興味深いのは、この働くという言葉が、もともと「仕える」という意味の言葉から来ているということです。名詞にすれば、「僕」とか、「奴隷」と訳される言葉です。つまり最初の人間アダムは、エデンの園で単に畑仕事をしていたのではなく、神様に仕え、神様の僕としての生活をしていたのです。それが、神様に造られた人間の本来の姿だったのです。神様に造られ、命の息を与えられて生きるものとなった人間は、神様の下で、神様に仕えて生きる使命を与えられていたのです。そしてその使命に生きるとき、神様は人間をいよいよ祝福し、いよいよ豊かに養い、良い実りと喜びに溢れる生活を与えて下さるのです。これは今も変わることがありません。わたしたちはこのことを覚えなければなりません。

次に「園を守らせた」とありますが、いったい何を守る必要があったのでしょうか。天地創造によってすべてが素晴らしく出来上がった地球において、何を守る必要があったというのでしょうか。ここにサタンの影を私たちは見るのです。サタンは人のために神様が創造された祝福に満ち、神様が良しとされたエデンの園から人を引き離したいと狙っていました。園を守らせたと言われるとき、サタンから園を守らせたというよりも、アダム自身の心を、神様から離れないように守らせて、祝福に満ちた園から追い出されないようにされたということなのです。ではどう守るのでしょうか。それは具体的に言及されています。

主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」創世記2:16，17

【水曜日・破綻した世界】

神様は人間に自由を与えられました。神様は人間がロボットのようにではなく、自由意志を用いて神様との麗しい関係を築きあげていくように望まれたのです。しかし、サタンは無防備な人間を狙っていました。人は簡単にサタンの誘惑に落ちてしまいました。禁断の木の実を食べたとき、ほんの一瞬だけ自分は大いなる存在になったかのような気がしました。しかし、それもつかの間、次の瞬間、あれほど完全だった世界がいっきに崩れ落ちていくのです。その変わりようにアダムとエバはどれほど驚いたことでしょうか。今まで生えていなかった茨やあざみが生えてきて、自分が裸であることを恥ずかしく感じ、さらに主なる神様を避ける自分たちがそこにいたのです。破綻したのはこの世界だけでなく、神様との麗しい愛の関係も壊してしまったのでした。人は守るように言われた園を、自分たちの心を守ることができなかったのでした。

神は女に向かって言われた。「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む。お前は男を求め彼はお前を支配する。」創世記3章 16節

お前は顔に汗を流してパンを得る。土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る。」創世記3章 19節

罪を犯した結果、女は子を産む苦しみが、男には顔に汗をしてパンを得る苦しみがやってきました。これは罪の罰でしょうか。確かに、自分たちが罪を犯した哀れなものたちであることを思い起こさせるのに十分です。しかし、産みの苦しみの後には素晴らしい命が与えられます。顔に汗を流して土を耕せば、種は目をだしやがて豊かな実りを迎えます。ここに神様の赦しが輝いているのです。

【木曜日・人類の家族としてのつながり】

罪の結果は、産みの苦しみや顔に汗する苦労だけではありませんでした。本当に苦しみは罪の本質を見せつけられることになることでした。憎しみや争い、妬み、高慢な思いなど本来あるべきではない思いに心が支配されるようになっていくのです。罪の最大の恐ろしさは、神様から心が離れ、変わりにサタンの心とつながってしまうことです。カインがアベルを殺し、罪の恐ろしさを目の当たりにしながら、アダムは罪の結果死がもたらされたことは、必要なことだったのだと悟ったのでした。

「金持ちと貧乏な人が出会う。主はそのどちらも造られた」（箴言22章 2節）と書かれてあります。本来、罪を犯さなければ、このような不平等なことはなかったでしょう。しかし、このことも人間が正しいものへと回復されていくための神様のご計画でした。「弱者を虐げる者は造り主を嘲る。造り主を尊ぶ人は乏しい人を憐れむ」（箴言14章 31節）とあるように、人との関係を通して、神様との関係をも取り戻していくことができるように、神様はご計画されたのです。